Title	巻頭言　死についての思い巡らし
Author(s)	高橋, 義文
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 3-7
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4930
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言　死についての思い巡らし

聖学院大学総合研究所所長　髙橋義文

わたしは裸で母の胎を出た。
また裸でかしこに帰ろう。
主が与え、主が取られたのだ。
主のみ名はほむべきかな。

ヨブ記第一章二一節（口語訳）

近年、死をめぐる議論が盛んである。それも最近は、「死生学」の名による学際的な研究が広がっている。本学大学院にも「臨床死生学」の科目があり、昨年度は「コロキウム」（全研究科合同のオムニバス科目）で「死」をテーマに取り上げた。また、本研究所においても、死生学に関する活発な研究活動が続けられている。

それにしても、死を考えることは難しい。古来、死をめぐる考察はあまたなされてきたが、どれ一つとして決定的なものはなかった。それどころか、そうした考察は、われわれを、いつも、死の不可思議さや不条理の新たな淵に導き、結局、諦めと焦燥感に追いやるばかりである。

キリスト教においても、死は大きな課題であり主題であった。というより、死は、キリスト教の根源的な主題に関わる。キリストの十字架の死と復活がキリスト教の救いの根拠であるからである。死はつねに復活との関係において捉えられ、「永遠の命」の約束が語られてきた。その意味では、「死んで生きる」すなわち「死生」の学はキリスト教的と言えよう。それゆえ、キリスト者たちは、死が、「退却中の敵」（エドゥアルト・トゥルンアイゼン［スイスの牧師・神学者］）であり、「やさしき死」（マッティアス・クラウディウス［ドイツの詩人］）であり、それどころか、「軽い死」（エーミル・ブルンナー［スイスの神学者］）でさえもあると主張した。

しかし、そのキリスト教も、死それ自体、あるいは死後の問題になると、歴史的に必ずしも明らかな姿勢をとりえなかった。そこには、ギリシャ的霊魂不滅の考え方が根強く入り込み、ほとんどそれが聖書的理解とされながら、他方において、「われは……身体（からだ）のよみがへり……を信ず」（「使徒信条」）と、復活信仰もまた保持してきたからである。

実際、キリスト教の葬儀において、霊魂の救いとからだの復活という矛盾をはらむ二つの象徴が用いられ続けてきた。晩年のラインホールド・ニーバーは、自らの問題として、死について思いを巡らしながら、キリスト教の中にそのような象徴の混乱があることは、「不死の信仰が、教義学的に厳密に突き詰めて考えられていないことを示すものであろう」と述べている。死は、神学的になお課題なのである。

死とはそもそも何なのだろうか。人間は死んでどこへ行くのだろうか。われわれはみな、単純で素朴なそうした問いへの答えを求める。せめてそれに触れた議論を聞きたいと思う。しかし、なかなかそこにたどり着けない。そこに諦めと、諦めきれない焦燥が交錯する。おそらく、答えのない問いなのであろう。人はみな、どのようにであれ、「生きて、死ぬ」が、その「死」を問題にせざるをえない。それは、人間の自然な思いである。その思いは、死を媒介に生を捉えなおそうとする「死生学」ではなく、生の終わりとしての死を考える。言ってみれば「生死学」である。（かつて岸本英夫はその著『死を見つめる心』で「生死学」の語を用いた。）

死者はどこへ行くのか――この問いについて思い巡らしてみると、ごく平凡な事実に眼をとめざるをえない。それは、「思い出す」あるいは「記憶にとどめる」ということである。親しい者を失ったとき、かろうじてすがるようにして得られる唯一の慰めは、「思い出」のなかに生きている死者の姿である。視点を変えて言えば、死とは、死者が、ほかならぬ、人々の「記憶」のなかへと移りゆくことではないだろうか。

この体は、どこに葬ってもよい。あなた方はそれに心をわずらわせないでください。ただ一つのお願いがある。どこにいっても、主の祭壇のもとで、わたしを思い出しておくれ。

これは、アウグスティヌスの『告白』に記されている、故郷への旅の途次、重い病に倒れた母モニカが、死を前に息子のアウグスティヌスとその弟に語ったという言葉である。そこにある「主の祭壇のもとで……思い出しておくれ」というごくふつうの、一見何の変哲もないモニカの言葉に、死をめぐる問いへの鍵が示唆されているように思う。それは「思い出す」ことである。死者が家族をはじめいろいろな人々の「記憶」にとどめられる。つまり、記憶のなかに死者は生きている。死者は、どこに行くのでもない、人々の記憶のなかへと移り、入っていくのである。

しかし、そこに大きな問題がある。人間の記憶は、たえず「忘却」の淵にさらされているということである。時が経てば、やがて、「忘れる」。皮肉なことに、忘れることが救いになることもある。だが、その場合、死者は行き場を失うのではないか。

あるいは、記憶してもらえる人がいない、まったくの孤独な死もある。無縁死が社会的な問題となってすでに久しい。もちろん、究極的には、傍らに誰がいようと、人間はみな一人で孤独に死んでいく。そうだとしたら、死者はどこへ行くのだろうか。

その点について、モニカのもう一つの言葉が示唆的である。モニカは「主の祭壇のもとで」と言った。それは、こう言っているように受け止めることはできないか。「息子たちよ、おまえたちの記憶に先立って、神が、わたしを受け入れ記憶にとどめておられる、それゆえ、この神の記憶のもとで思い出しておくれ」、と。

つまり、死とは、人間の記憶のなかへと入るだけでなく、究極的には「神の記憶」のなかへと入っていくことではないのか。人間は忘れる。あるいは、憶える人のいない死を迎えることになるかもしれない。しかし、神は死にゆく一人ひとりを記憶にとどめられるのである。

死が何であるのか、われわれの側からはわからない。しかし、「神に憶えられている」なら、神の眼には明らかなはずである。人間は「内」からはわからないが、「外」から捉えられて初めてわかるということがある。われわれの記憶ははかない。記憶されることさえないことがある。それゆえ、神の記憶という「外」において、初めて記憶は相対性をまぬかれ確固たる永遠のものになるのである。もちろんそれは、それは知的な認識ではない。むしろ、「秘義への畏敬」なしに、死を考えることができないことは、われわれの「経験」というべきであろう。しかし、「秘義への畏敬」なしに、死を考えることができないことは、われわれの「経験」が知っていることである。その意味では、この視点もまたわれわれの経験と深い関係にあると言ってよい。冒頭に掲げたヨブの言葉が、摂理の信仰から出た言葉でありながら、われわれすべてを納得させる普遍性を帯びているように見えるのは、そのゆえであろう。

中世の修道院では、「死ぬことを覚えよ」がモットーであった。しかし、われわれのモットーはむしろ、次のようになるであろう。――「憶えられていることを覚えよ」。